MOTHER ～The Star Story～

星里 天理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＯＴＨＥＲ　～Ｔｈｅ　Ｓｔａｒ　Ｓｔｏｒｙ～

【Ｎコード】
Ｎ３９１３Ｗ

【作者名】
星里　天理

【あらすじ】
どこか分からないところの、どこか分からない時間。
人知れず、地球のどこかで、異変が起きる。
それを知った神様は、不思議な力――ＰＳＩ――と？信じる力？を持った
人間を捜しだし、その人間に、？地球を救う戦士？になる事を命じた。
だいたい４つめの、『ＭＯＴＨＥＲ』。

はじまり（前書き）

この小説は、「ＭＯＴＨＥＲ」というゲームを知ってなくても
分かるように努力して書いてますが、知ってた方が面白いかもです。

はじまり

まだ、お天道様も昇らない、朝早い時間。
赤ん坊が、捨てられていた。
不思議なくらい、綺麗な肌をして
とても清潔な、白いタオルに包まれて
赤ん坊が、目を覚ました。

最初は、あたしだって、驚いた。
あんな伝説、ただの迷信だって、思ってた。
本当は、とても　とても、怖かったけど
あまりにも、あの子に
あたしの愛する人に、似ていたから
あたしは、その子を、育てる事にした。

抱き上げてやると、その赤ん坊は、手足をばたつかせて、無邪気に笑った。

これが、ぜんぶの、はじまり。

はじまり（後書き）

あまりにも、あの名作ゲーム「ＭＯＴＨＥＲ」シリーズを愛するあまり、
自分でもそれっぽい話を書いちゃいました。
ＭＯＴＨＥＲっぽくないところもありますが、そこはご了承下さい（？）。

第一歩

少年は、夜空を見ていた。

イマドキではめずらしく、それこそ宝石の如く、キラキラと星が瞬いている。

ここ、？ホロスコープランド？で一番の田舎町、？ジェニア？は、星が綺麗に見えると
それなりに有名な町である。

――どうにも今日は、眠れない。
いつもなら、こんな時間、とうに高鼾をかいて寝ているハズなのだが・・・

少年はため息をつくと、再びベッドにもぐりこんだ。
――眠れないのを、知っていながら。

この少年、名を「テンリ」という。

ジェニア・エレメンタリー・スクール、第六学年。
つまり、ジェニア小学校の六年生である。

年は十二歳、七月三十一日生まれの獅子座。
身長は、平均よりもやたら高く、時々中学二年生と間違えられるほど。
運動神経がずば抜けて良く、やけにケンカが強いから、学校では「

ケンカ番長」として有名だ。

普段は緑と黄緑の、フード付きのボーダー服に、赤い野球帽をかぶっている。

勉強はできないが、読書を好むため、変な事ばかり知っていたりする。

そしてもう一つ、テンリの最大の特徴がある。

その特徴とは、テンリの瞳にある。

一つ目だとか、邪鬼眼（？）だとかとは少し違うが、限りなくそれに近い類ではある。

その特徴とは――

テンリは、黄色の瞳を持っているのである。

何故黄色の瞳なのか、テンリの母にも、ジェニア一の腕を持つ医者にも、分からない。

それ以外は、見た目も生活も普通の人間と変わらない、所謂？普通の人？である。

だが、それは、あくまで？他人？から見た感想。

?本人?、つまりテンリは、自分が?普通の人?ではなく、
?異常な人?である事に、気づき始めていた。

「・・・よいしょっ」

テンリが、ベッドからゆっくりと降りた。
どうやら、下の階のリビングルームに置いてある本を取りに行くらしい。

その本は、テンリが今まで読んできたたくさんの本の中で、一番のお気に入りだ。

テンリが幼いころ、家の本棚を漁っていた時に見つけたもの。
母さん曰く、「出張中の父さんの愛読書」らしい。
幼いテンリは、それを有難く（勝手に）頂戴した。

計三冊。
三冊とも、何かが繋がっているような感じがしないでもな無いような本だが、
テンリはその本が大好きだった。

先ほど、少し書いた?赤い野球帽?も、その本に出てくる、計三人の主人公のうち、
二人の主人公が身に着けていたもの。
そしてもう一つ、三人の主人公が全員持っていた、雷のような模様が入ったバッヂも、
ちゃんと持っている。

この二つのアイテムも、母さん曰く、「出張中の父さんの宝物」だそうだ。
幼いテンリは、それも有難く（勝手に）頂戴した。

少し話がそれたが、とりあえず、テンリの大のお気に入りの本である。

しかし、その本は、とても奇妙なのだ。

まず、本の表紙。
三冊とも、まったく同じデザインである。
・・・それだけなら、まだマシだ。

問題は、そのデザインにあった。
その問題点を、簡単にまとめると。

・タイトルらしいタイトルが、見当たらない。
・作者、著者が分からない。
・絵はおろか、模様すら施されていない。　ただの真っ赤な表紙である。
・もちろん、裏表紙も、ただの赤だけ。

・・・だいたいこんな感じだろうか。

他にも、奇妙な点はたくさんあるが、いちいち言うと話が進まないので、割愛させて戴く。

テンリが、部屋のドアノブに手をかけた、その時――

「きゃあっ！！」

超鈍感男テンリも、流石にこの声には驚き、慌てて後ろを振り向いた。

そこには――

ベッドの上。

月の光に照らされて、妖しく浮かび上がる人影。

「――――――――――？！！」

テンリの思考が、完全パニック状態になりかけた、その時。

一筋のまぶしい光が、テンリの瞳を貫いた。

反射的に閉じた瞼を、ゆっくりと開けると――

一人の、女性がいた。

――いや、？女性？というには、まだはやい年頃かもしれない。外見的に、十四歳くらいか。

その女は、つかつかとテンリの前まで歩み寄り、腰をかがめると、じっとテンリの顔を見つめた。

一方、テンリは、その不思議な紫の瞳に見つめられ、金縛りにあったかのように動けない。

やがて女は、顔を上げて一歩下がると、こう言った。

「やっと見つけた――黄色の瞳を持つ少年、？テンリーナ・ウィルバー？を・・・」

「・・・え？」

――こうして、テンリの奇妙でおかしな冒険が、始まった――

第一歩（後書き）

ようやく本編第一話、書き終えました！
まだまだ「？」な所が多々あると思いますが、追々明かしていく予定です！
・・・え？そんな所無いって？
・・・・・・・じ、次回をお楽しみにっ！！；；（焦）

乙女と天秤の、ビゴロ

よく見ると、その女はとても美しかった。

太陽の光を集めたかのような、オレンジのかかった金色の髪は、腰の辺りまである。

とても大人びた、だけどどこかに少女の面影を残したような、不思議な顔立ち。

紫色の瞳は、ずっと見ていると、まるで得体の知れない魔法をかけられたかのような錯覚を受ける。

しかし、その美しい顔とは対照的に、地味な、灰色のワンピースを着ている。

襟の間には、星の模様が施された、薄い金色のブローチのようなものをつけていて、

そこから赤いリボンが垂れ下がっていた。

「もう、あまり時間が無いから、単刀直入に言うわね。」

「・・・」

相変わらずフリーズしているテンリをよそに、女はサクサクと話を進めていく。

「あなたには、この地球を、救ってもらいます」

「・・・・・・な」

漸くテンリが、口を開いた。

「なんなんだよお前は！！イキナリ人の部屋に侵入してきてよぅ！！しかも今は真夜中だぜ？！ちったぁ常識を・・・」

「待って」

女が、テンリの言葉の暴走を止めた。
とたんにテンリは、おとなしくなる。

「とにかく、私の話を聞いて。　本当に、時間が無いの」

そういう女の表情は、どこか苦しげだった。

「・・・分かった、聞く」

女の顔を見て、何かを察したのか、静かに言った。

「ありがとう。」

女の表情が、少し柔らかくなる。
そして、訥々と、鈴を転がしたかのような声色で、語りはじめた。

「まず、私の名は、ビゴロ。」

「・・・・・・えっ？」

「だから、乙女と天秤の、ビゴロ。・・・おっと、質問は後にして下さい」

再び、言葉の暴走を始めようとしたテンリを、女――ビゴロが止めた。

ここ、ホロスコープランドでは、いくつかの、古ぼけた言い伝えが残されている。
その中の一つに、「六人の神様」という話があるのだ。

――むかし　むかしの　そのまた　むかし。

とても　とても　へいわな「ホロスコープ」という　くにが　ありました。
ホロスコープは　１２この　まちから　なりたっており、そのうち
６つのまち　には、
かみさまが　すんでおりました。

ひとりめの　かみさまの　なまえは「ゲミニィ」といいます。
ゲミニィは　おひつじざと　ふたござを　つかさどる　かみさまです。
みためは　こどもですが、まるで　おさるさんのように　すばしっこいのです。
いつも　わらっていて、まわりにいる　みんなまで　えがおになっ

て　しまいます。

ふたりめの　かみさまの　なまえは「ビゴロ」といいます。
ビゴロは　おとめざと　てんびんざを　つかさどる　かみさまです。
とても　うつくしい　おんなのひとで、いろんなことを　しっています。
その　ちしきをいかして、まちのひとに　いろんなことを　おしえてくれます。

さんにんめの　かみさまの　なまえは「カプリコン」といいます。
カプリコンは　やぎざと　かにざを　つかさどるかみさまです。
みんなを　おどろかせるのが　だいすきで、あまり　すがたを　みせません。
でも、こまったひとがいたら　すぐに　たすけてあげる、とても
おひとよしな　かみさまです。

よにんめの　かみさまの　なまえは「アクエリ」といいます。
アクエリは　みずがめざと　うおざを　つかさどるかみさまです。
からだの　じょうはんしんはひと、かはんしんは　さかなのおひれ
という、にんぎょです。
なので、いつも　みずうみのなかに　いますが、まちのひとからの
しんらいは　あつい　かみさまです。

ごにんめの　かみさまの　なまえは「スコーピオ」といいます。
スコーピオは　さそりざと　いてざを　つかさどるかみさまです。
とても　ものしずかで、いつもは　きのうえでねています。
こどものめんどうを　みるのがとくいな、とてもこころやさしい
かみさまです。

ろくにんめのかみさまのなまえは、「レオ」といいます。

レオは　ししざと　おうしざを　つかさどるかみさまです。
ろくにんの　かみさまの　なかでは　いちばんつよい、かみさまです。
なぞがおおく、どのまちにいるかも、あきらかに　なっていません。
・・・・・・・・

これは、テンリが幼いころに読んだ「ホロスコープのいいつたえ」
という絵本の内容
そのままである。
あまりにも古いとされている言い伝えなので、もう誰も知ろうとは
しないのだが、
物好きなテンリは、何回もその絵本を読み返し、今ではすっかり暗
誦できるほどだ。

――この女は、今、「ビゴロ」と名乗った。

確かに、その女の美貌は、人間離れしすぎている。

この世にあってはならないような、美しさ――

そんな事が、テンリの頭に浮かび、なんだか恐ろしくなって、思わ
ず身震いをした。

乙女と天秤の、ビゴロ（後書き）

・・・なんか今回は、あまり話が進んでませんね；；
なんか、あのまま続けると、とんでもなく話が長くなりそうだったので、
無理矢理終了させました；
次は、もうちょい進められるように頑張ります・・・

ビゴロの推測

「とりあえず、今は、おとなしく話を聞いていて下さい。――いいですね？」
コクリと頷くテンリ。

「では――」

そう前置きして、漸くビゴロは、用件を伝え始めた。

――今ではもう、誰も信じていないに等しいが、あの言い伝えは、本当の事らしい。
そして驚くべき事に、六人の神の一人、？ゲミニィ？は、この町に住んでいるというのだ。
もちろん、人間のフリをして、であるが。
ビゴロは、ジェニアの隣の町、？フェビラ？に住んでいたという。

ちょうど、今から一年程前の話。
ある日、ジュライという村が、　おかしくなった――という噂を聞いた。
ジュライには、自分の仲間、六人の神の一人である？スコーピオ？が住んでいる。
スコーピオは、六人の神のリーダー、？レオ？と互角に戦える程の、強い力を持っている筈だ。

――そんなスコーピオの守る村に、異変が起きるなんて、信じられない！
そう思ったビゴロは、自分の足で、ジュライ村に向かった。――が。

以前まで、いつも開け放されていた村の入り口の門が、固く閉ざされていたのだ。
その上に、目つきの悪い人間二人が、門を見張っていた。
村に入れてくれと頼んでみても、「入れる訳にはいかない」の一点張りで、話にならない。
その日は、諦めて、おとなしく帰った。

それから、数日後。
今度は、自分の守っている町で、異変が起きた。
町の人気者である少女が、一人、行方不明になったのである。
ただそれだけだが、フェビラの町はもう大混乱。
騒ぐ者、パニックを起こす者、終いにはその少女を捜しに行こうとしている者までいる。

そんな中、六人の神の？ゲミニィ？が、フェビラを訪れた。
そして、生気の無い声で、ビゴロに、こう言った。

「ギィグ様は、退屈している。僕達が、ギィグ様を、喜ばせなくちゃあならない。――ビゴロも、協力してよ。」

――さあ、いよいよおかしいぞ。
そう思ったビゴロは、ゲミニィを帰した後、他の六人の神と、連絡を取った。
……しかし、もう手遅れだったらしい。
連絡が取れないスコーピオを除く全員が、ゲミニィと似たような事を言っているのだ。
正常なのは、恐らく、ビゴロ一人だけ。

――嫌でも、やるしかないじゃない……

ビゴロは、普段、おっとりしているようで、行動は早い。
さっそく、六人の神が守っている町に出掛けた。

そうして、様々な町で聞いた情報や、家にある古い書物を頼りに推理していった結果――

この騒動を鎮めるのは、？赤い悪魔？にしかできない、という結論に至った。

ビゴロの推測（後書き）

うへえ、前の更新とかなり間が空いてしまいました；；
今回は、早く更新したかったのと、書き続けたらとんでもなく長くなりそうだったんで、短めになりました；；
もっと更新の速度を早くしたいだす…

赤い悪魔

赤い悪魔。

これも、ホロスコープランドの言い伝えの一つに出てくる、言葉だ。
テンリは、この言葉も、知っていた。
――長い間、テンリを苦しめた、忌まわしい言い伝えである。

その言い伝えによると――

遥か昔、このホロスコープランドができたばかりの頃。
赤い体に、黄色い瞳を持った悪魔が、この地を六人の神から奪おうとしたらしい。
激闘の末、六人の神は、赤い悪魔を退治する事に成功したそうだ。
しかし、その悪魔は、死ぬ間際、こう云った。

「――遠い未来、儂は、必ず、人間に生まれ変わり、貴様らに復讐する――」

そして、その生まれ変わりが、テンリなのだ。

テンリが幼い頃、周りの者は、常にそう囁いていた。
その所為で、テンリは、幼い頃、いつも辛い思いをしていたのだ。
…閑話休題(それはさておき)…

とにかく、黄色い目をした人間なんて、そう簡単にはいない。
だから、いろんな町を、虱潰しに探していった結果――

今日、ここで、黄色の瞳を持つ人間――テンリ――を見つけたのだ。

「やっぱり、私の推測は中っていたわ。だって、あなたは、目が黄色いだけじゃなくて、
?ＰＳＩ(サイ)?の力も備わっているもの。」

嬉しそうに、ビゴロが呟いた。
話を聞き終えたテンリの頭の中には、たくさんの??マークが渦巻いている。

「…いろいろと質問したいんだが、いいか――?」

顔をしかめながら、恐る恐る手を挙げるテンリ。

「どうぞ。」

ビゴロが頷いたのを確認してから、テンリは、質問を始めた。

「まず、?さい?って、なんだ?」

「ああ、それはね、簡単に言うと、?超能力?って事ですよ。」

「……」

テンリが、ため息をつく。

――やっぱり、な――

心当たりは、大有りだ。
最近は、その力は弱まりつつあるが、テンリは、どう考えても？超能力？としか呼べないような
力を持っているのだ。
動物の言葉が聞こえるのなんて当たり前。
ケガだって、ひどくなければ、遊んでいる内に治ってしまう。
下手すれば、そこらにある物を壊しかねない。
昔は、そんなことが、日常茶飯事だった。

「ビゴロ…さん。オレ、確かにさ、それっぽい力、使えたさ。使えた、な。過去形。」

「はい、それくらい、分かってますよ。大丈夫です、私がまた、使えるようにしてあげます。」

そう言って、ビゴロは、にっこりと笑った。
その笑顔を見て、テンリは、苦虫を噛み潰したような顔をした。
――もう超能力なんて、こりごりだ！
心ではそう叫んでも、口は勝手に動いて、次の疑問をビゴロに問う。

目の前の女から紡ぎだされる数々の言葉は、まるで星屑のようになって、少年の心を揺さぶっていく。
表面では、いくら不機嫌を装ってみても、テンリは、この物語の中のような状況に、ワクワクしていた。

「…じゃあさ、どうしてビゴロ、さんは、その騒動とやらを救えるのは、？赤い悪魔？だけだって、

分かったんだよ？」

この問いには、答えてくれなかった。
ただ、ビゴロは、一言、
「女の勘は、良く中るのよ」
とだけ言った。
テンリは、この問いに対する返答を諦めて、また次の疑問を問う。

「その騒動を放っておいたら、どうなる？」

「間違いなく、ホロスコープランド（この世界）は、大混乱の末、終わってしまうでしょう。」

すかさず、ビゴロが答えた。

――ああ、それは厄介だ。
いきなりそんな現実離れしたことを言われたって、テンリの頭は、このくらいの反応しかできない。

――だから、

「じゃあ、」

――いやだ。オレは、そんな面倒事に、巻き込まれたくない。

「オレは」

――ああ、

「オレは、何をすりゃあいいんだよ」

赤い悪魔（後書き）

強引に話を進めたんで、今回は、かなり急展開になってると思います。
本当に滅茶苦茶ですね、この話…
自分に文才が無いという何よりの証拠です…
あ、因みに、「閑話休題」のルビは「それはさておき」、
「ホロスコープランド」のルビは「この世界」です。
もうそろそろ、プロローグの章は終わると思います。
これから、徐々に、中二臭くなっていくよ！↑

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3913w/

MOTHER ～The Star Story～

2011年11月30日17時48分発行